

割烹着な人びと

めぐる冒険 15
わっぱりを



加藤ジャンプ

またまた感染者が爆発的に増えている。

縁あって、テレビの深夜番組で、居酒屋の案内人のようなことをさせてもらっているが、今まではメイン出演者の方がたとゲストの横をちょこちょこついてまわっていた。ところが、いまは、私と同様の役目をおっている二人の飲兵衛さんは、コロナのせいで一人でロケにでている。そこで、手持ちのカメラを持って、ひたすら飲んで食べて話す。

見てくれた居酒屋の店長氏が「なんだか YouTuber みたいですね」と言ったが、それを聞いた途端、急に儲かるのかな、と邪念がよぎってしまった。ならば、そのときは、割烹着を着て出ようかなと半ば本気で聞き返したら、

「割烹着で稼ごうとしすぎです」とたしなめられた。

コロナは以前にもまして猛威をふるっている。

そんななか、エラぶった人たちは、旅行を推奨し、なかには「5つの『小』」なんて間抜けなことをぬかす人まで出てくる。

小馬鹿にするのもたいがいにしてほしい。せめて

「小綺麗に」などと言って割烹着でも着て記者会見してくれば、この連載もさらに人々の耳目に触れることになったのだろうか、そんな小粋なことをする知事ではなかった。

そして宴会の席では、マスクは飲み食いするときだけ片耳にかけて、すぐに戻しましょう、なんて得意顔で言う政治家まで出てきた。ためしにやってみたら、いきなり片方の紐が切れて使い物にならなくなった。ある飲兵衛は、はずしたら紐が治部の汁に浸かってし



「マスクと割烹着って微妙なのよ」とおかみさんは言った

まったと言っていた。その時、折あしく、ちょうビスペアを持っていなかったたので、已む無く汁びたしになったほうのマスクの紐をちり紙で拭ってまた使ったそうだが、

「耳元からずつと汁のおいがして腹がへる」と嘆いていた。クロイ〇方式はたぶん役立たずである。

「割烹着とマスクって微妙なのよ」

そう言ったのは、東京の、あと一息で千葉というエリアにある商店のおかみさんだった。ふだんから、前にボタンのない紐でとめる方式の古典的な割烹着なしは、ボタン留のモダン型割烹着を着て仕事をしているという。割烹着を着てマスクをしていたので、いつものように飛び込みで聞いたのである。

——割烹着似合いますね

「誰でも似合うでしょ」

かなり無愛想な返事だったので、私はちよつと焦った。とはいえ、そんなことで怯んではいられない。そっけない返事は下町の気風だと思っことにして食い下がった。

●かとう・じゃんぶ 文筆家。1971年東京生まれ。横浜とジャカルタとジョグジャカルタとクアラ Lumpur で育つ。著書に『コの字酒場はワンダーランド』（六耀社）など。タイトル、本文中のイラストも筆者。